

愛和な家庭を築く六つの鍵

上 廣 哲 治

今年一月に亡くなった写真家の奈良原一高さんに『王国』と題した写真集があります。二つの閉ざされた場所生きる人々の姿を撮影したものです。一つは北海道のトラピスト男子修道院。もう一つは和歌山県にある女子刑務所です。修道士は自らの意思で、修道院という外界と隔絶した聖なる空間で生涯を送ることを決意した人々です。一方、女子刑務所の囚人は、罪を犯し社会的な裁きを受けて、投獄された人々です。望んで閉ざされた場所で生きる修道士と、不本意ながら刑務所で暮らす囚人を対比した作品です。奈良原さんは、二つの閉ざされた世界に生きる人々の姿を通して、人間の生きる姿勢を表現しようとしたのです。この二つの世界には静かな時間が流れています。一方には安らぎと安心、充実があるのに対し、他方には憤りと不安、空虚があります。自らの意思で行動するのか、強いられて行動するのかによる違いでしょう。

私たちは新型コロナウイルスの拡散を防ぐために、外出自粛の「巣ごもり生活」を余儀なくされてきました。外国の都市封鎖のように強制的なものではありませんが、決して望んでしているわけでもありません。その意味では、先の奈良原さんの作品でいえば、囚人の暮らしに近い部分があるのかもしれませんが。しかし、自粛生活の意味を「利他の実践」ととらえなおし、「私たちは、感染拡大を防ぐために自らの意思で自粛している」と主体的に考えれば、修道士の生活のように安らぎと安心、充実を得ることができないではないでしょうか。

とはいっても「巣ごもり生活」は決して楽ではありません。したいこともできず、会いたい人にも会えません。外出自粛や休校、在宅ワークなどが長引くなかで、ストレスが高じて児童虐待や家庭内暴力にはしる事例が増えていると新聞は報じています。

人は誰でも学校や職場など、社会との関係を保ちながら暮らしています。その社会との絆が断たれ、自宅という孤立した空間に閉じ込められ、四六時中家族と顔を向き合わせている。知らぬうちにストレスがたまり、情緒が不安定となり苛立ちが募り、ついには暴言や諍いにまで発展するのわからないではありません。でも、家族にストレスをぶつけるのは見当違いというものです。ストレスの原因は家族ではなく、新型コロナウイルスなのですから。家族も同じ被害者なのです。

いま第一になすべきことは、家族それぞれが抱えているストレスを解消させる努力であるはずですが。自分のストレスはひとまず措いて、夫や妻、子どもを思いやることです。家族を守るためには、いま何ができるかを考えるのです。身近な人への思いで心が満たされれば、自分への執着から解放たれて心も軽くなるはずです。家族に何かを求めるのではなく、まず自分が家族のために何かをすることです。『星の王子さま』で知られる作家のサン＝テグジュペリは、「愛とはお互いを見つめ合うことではなく、共に同じ方向を見つめることである」と言いました。相手を見つめてそこに愛を見出そうとするのでは

なく、共に愛を育むために二人で歩んでいく——それが本当の愛なのではないのでしょうか。家族に癒しや慰めを期待するのではなく、家族みんなで仕合わせを目指して共に手を携えて歩んでいく。そして、家族が一緒に見つめる先にあるものこそが「家庭愛和」なのではないのでしょうか。

ではどうすれば家庭愛和を実現することができるのか。ここで見直したいのが、初代会長が六十年以上も前に、その著書『明るい生活』で提唱した「愛和な家庭を築く六つの鍵」です。教えはいつも古びていません。古びるところか「新しい生活様式」を考えるうえで、いまこそ見直したい実践的な教えです。教えの根底には、幼い子どもといえども一人の人間として尊重されなければならないという強い人権意識が貫かれています。家族だからわかってくれるはずだと、感情のままに遠慮のない口調で批判や不満をぶつける人がよくいます。でも、言われたほうは深く傷ついているのです。それが諍いの種になったりもします。「六つの鍵」の実践は、そうした感情の暴走を防ぎ、家族を家庭愛和の方向へと着実に歩を進めさせてくれるはずですよ。

「第一の鍵」は、「不足をいうな」です。不満やストレスの原因は新型コロナウイルスであって、家族ではない。家族は不満をぶつける対象ではなく、家庭愛和に向かって共に歩む同志です。「第二の鍵」は「相手の領分に干渉するな」です。家族にはそれぞれ社会的な生活とそれぞれの役割がある。事情をわきまえずに口を出すことは厳に慎むべきです。「第三の鍵」は「小言と批評を止めよ」です。叱ったり批評したりする前に、まず自らを省みることが大切です。こうして、「第四の鍵／相手の心に溶け込む」「第五の鍵／どこまでも親切に」「第六の鍵／親しき仲にも礼儀」へと続きます。

なかには「そんなことわかってるよ」とおっしゃる方がいるかもしれませんが。しかし、理解はできても、きちんと実践することはとても難しいのです。

先日、公園でオニごっこをしている家族を見かけました。幼い子どもが逃げ回るのを、オニになった父親が追いかけています。母親も遊びに参加しています。子どものはしゃぐ声が風に乗って聞こえてきました。何ということもないありふれた光景ですが、ふと、コロナ以前に見かけただろうかと思えました。親は満員電車に乗って通勤し、夜遅くまで会社で働き、効率や生産性や利益率に追い立てられ、家族と過ごす時間は少なかったのではないかと思ったのです。

作家の村上春樹さんが自らディレクターとなり、テーマに合わせて選曲し語る、深夜のラジオ番組があります。そのなかで村上さんはこんなことを言っていました。自粛生活を通じて、僕らの生活にとつて「なくてはならぬもの」は何か、「なくても別に困らないもの」は何か、そういうことが見えてきた。これまでの生活をもう一度見直す社会実験が世界規模で行なわれているのではないか。それがコロナ後の世界を方向づけていくのではないか、というのです。

自粛生活ではマイナスの側面が語られがちですが、村上さんの発言のように、「なくてはならないもの」を再発見できたというプラスの面もあるはずですよ。その一つが、人は多くの人に支えられて生きていくという事実の再認識です。コロナの危機は、そうした人たちが知恵を絞って協力し助け合って危機を乗り切っていくかどうかという試練なのです。

そして、もう一つに「家庭愛和」を挙げたいと思います。これから迎える「新型コロナウイルスと共生する時代」には、家族の絆の大切さと、家庭愛和の価値が見直されるでしょう。言い換えれば、アフターコロナはこれまでに以上に家族と共に生きることが重要な時代となるのではないのでしょうか。